# 追悼

藤田健作

平成四年一月十四日前神戸大学教授現流通科学大会教授桂　芳男先生が急逝されました

先生はライフワークとして、関西の商社の源流として鈴木商店の歴史を深く研究され、特に金子直吉翁の活躍について詳細な論考を度々発表されておられます。たつみ会にも数度に亘り御出席になり、御高話を拝聴しました。

私としては平成三年九月十七日　太陽鉱工株式会社会長社長御就任の御披露に御招きを受けて先生とポートピアホテルの喫茶室で暫し懇談したのが最後の御別れになってしまいました。

ありし日の　鈴木の足跡
踏みしめ　踏みしめ
身を献じ　ですね…

俳句交わりの話しに
掘れど　掘れど　泉の如く水溢ふるるでしたと返礼の句が帰ってきました。

先生の著書、初の総合商社鈴木商店の著書が語り草として残りました。

名誉博士の稱号授与が先生の背に光り輝きました。そして第二の人生流通大学御就任の矢先御別れの悲報に後の言葉がありません。

霊よ　永遠に幸あれかしと祈るのみです。



# 鳥羽の今昔

田中卓次

鳥羽の昔を知る人は現在の鳥羽駅に降りて最初に感じる事は、下車駅を間違ったのではないかと思う程変わっている事である。

昔の鳥羽駅は国鉄のみで、線路の外側は海岸壁であり、駅前は飲食土産店が一軒のみで、少し離れて旅館が数軒あった。

現在の鳥羽駅は大範囲に海辺の埋立により近鉄の乗り入れを伴い、駅前附近には大商店街館が建立され、高層建築の旅館も出現している。

私は大正十五年神戸製鋼所に入社、鳥羽電機製作工場に赴任した。日給二円の技工員である。

当時は電車は無く、大阪湊町駅より列車で六時間、京都よりは五時間を要する田舎の漁港であった。

又関西汽船の神戸、名古屋間船路の一寄港地でもあった。

工場は城山の東南海岸にあり、造船部が主力で電機部は其の一隅にトタン葺の平屋で、二百名程の工員が働いていた。

電機、造船合同の社寮が加茂村の落口にあり、入社当初は寮に入った。志摩電鉄は未だ無いので赤崎より錦町を通り正門（現料亭漣の前）より入場するので徒歩約四〇分を要した。

入社の翌、昭和二年鈴木商店は倒産し、神戸製鋼所は整理され、鳥羽造船所は閉鎖、播磨造船所に移転合併される事になった。

電機部は田宮専務（後の社長）の英断で一応存続し今後の情勢を見て快められる事になった。

これにより電機部の敷地を除き、造船部の敷地は一般に売却された。工場跡地は中央に道路が出来、ドックには架橋され、中の郷海岸に主たる道路が通じ、民家も数軒新築され、造船所の跡地は急変した。

電機工場は一小地区に居残ったものの生産量は少なく経営は苦しく、何れ閉鎖される運命と思われていた。

これより以前に電機部では帝人より久村専務の御好意にてポットモータ（人絹紡糸用堅型小形三相誘導電動機）の試作注文を受けていた。この試作の成否が電機部の存続に係わっているので昭和三年初め頃より京都大学電気工学科の馬養教授（後の京大総長、小田島工場長と同期）を顧問後に依嘱し毎月鳥羽工場に来場を願い御指導を頂いた。毎月試作を繰り返し、約一ケ年で遂に実用できる段階迄に成功した。

帝人にては昭和四年頃よりこのポットモータを多量に採用された。これに次いで数々の改良を加え帝人は勿論国内他の新旧人絹会社よりの注文が続き電機部の成績は急向上し今迄の輸入品を殆ど駆逐した。これにより旧造船所跡地を遂次買い戻す事が出来た。

人絹の全盛期も満州事変迄以後は減産を強いられ、昭和十三年以降はポットモータの生産を中止せざるを得なくなった。これ迄に生産したポットモータは累計二五万台以上に達している。

ポットモータの生産中止後は軍部の航空機用電機品の生産に当てられ、鳥羽工場は陸軍の監理工場となり、日本陸軍の八〇％以上の生産を行なった。

鳥羽工場のみにては軍の要望に応じられないので昭和十六年には伊勢工場を、昭和十九年には松阪工場を開設した。

終戦後鳥羽工場は戦災を受けなかったので他のメーカに先立って電車用主電動機を生産する事を得、順調な復興が出来た。

戦後の鳥羽は開発ブームで駅前埋立て、近鉄乗入れ等により、観光の主目的地となった。

神鋼電機に於いては鳥羽工場の将来を考える時次の事項に問題があった。

一、地理的に交通不便で、製品の運搬と大きさに制限がある。（トンネル等で）

二、特高電力（二万V）の電源が得難い（現六千V級、生産量が制限される。）

三、労働人口が僅少で増加の見込みは薄い等の事項で適地を物色中

昭和三十六年豊橋市に適地（十万坪）を購入先づ鳥羽工場より大型製品の生産を移す事になった。

丁度この時期に（昭和三十九年）伊勢湾フェリーが創立され鳥羽、伊良湖間の運行が開始された。次いで豊橋、伊良湖、鳥羽間が国道に昇格し、鳥羽、豊橋間が一層便利になり、豊橋工場建設に大いなる援助を受ける事になった。

其後近鉄が特急を賢島迄延長する計画を作った。以前に合併した従来の志摩電鉄の線路では特急運転に不都合の為、神鋼鳥羽工場敷地の一部の売却を要望して来た。鳥羽工場としては要望の土地は工場として最重要の部分で、到底要望に応じられない土地であった。

再三話合いの末、止むを得ず一時は鳥羽工場の全土地建物共売却し、全工場を移転する案に快ったが、市当局や従業員の事情も考慮して、中型は豊橋工場へ移すが、小型は鳥羽で別地に新工場を造成して移し、従来の工場は土地建物共全面的に売却する事に決定した。

新鳥羽工場としては鳥羽駅と鳥羽商船高等専門学校間の国道山側約二万坪を求めた。

これにより旧鳥羽電機工場跡は近鉄複線路と四車線の国道と伊勢湾フェリー会社と其のパーキング広場と鳥羽水族館の延長新館で占められる事になった。

旧鳥羽造船所跡が六〇余年の間に二転三転と変貌した現在、昔を知る関係者の一人として一抹の淋しさを感じている。

（平成四年五月）

## 「上を向いて歩こう」

西村　銕次郎

私は現在東京在住だが、暮れからお正月は毎年芦屋のアパートで十日ばかり過ごしている。

元日は朝早く家を出て、九時頃京都の私の生家へ新年の挨拶に行く事にしている。京都で呉服商を営んでいる私の生家は、父の代から兄の代を経て今は甥の代になっている。毎年本家に集まる風習は私の子供時代から尚続いている。その形式は非常に簡素になり、集まる人も今では十数人に過ぎないし、集まる時間も九時から十時過ぎまでの一時間半ばかりの間に終わるが、年に一度此處で顔を合わせるのは楽しいものである。

次男の私が分家をして京都郊外の日向市に新居を構えた年の昭和九年から今日まで五十八年、この間勤務地の関係から参加できなかった十回ばかりを除いて皆勤している。

私が東大でゼミの御指導を頂いた脇村義太郎先生は、東大定年御退任後の三十余年前から、毎年お正月は京都ホテルで御家族と共にお過ごしになって居り、元日は昼前から神詣でをなさっているが、昭和五十七年からお誘いを受けて神詣でのお供をしている。今年で早十回目を迎えるが、之もお正月の行事になっている。

「辰巳会」が昭和三十五年に発足し、鈴木商店の作った帝人に勤務した関係で、目下その東京支部の幹事の一員となっているが、此の会員百五十八名の平均年齢が八十七才で、私は未だ此の年齢に達せず若いつもりで此の会の催しに顔を出す事が出来る。

一昨年秋京都一中同窓会京阪支部の総会に出席した處、私より十年先輩が満九十五才で元気な姿を見せられたのには大いに気を強くした。

一昨年アメリカのポートランドで催されたロータリー大会に出た時、高知在住のパストガバナー満九十歳でただ一人でグループに入り旅行をして居られた。首からカメラをさげ、右手にビデオ撮影機を持って居られた姿を見て驚いた。

『ＰＨＰ』の昨年二月号に「百一年見届けた人間ドラマ」と題して津市の弁護士樋口恒通氏の記事が出ていたが、大いにあやかりたいと思う。

年老いて健康で暮らせる程幸福な事はないと思う。

ＪＲのジパングクラブに入会して早数年経ったが、年二十回の三割引の切符は毎年殆ど総て利用している。



映画館の入場料などもシニアとして半額の待遇が受けられる。都営バス、地下鉄は東京では所得制限の為有料になっているが、一万七千五百円で一カ年間利用出来るのも誠に有難いものである。

永い間入会している交詢社、大阪倶楽部、茨木カントリー倶楽部は総て特待社員として会費を免除されているのみならず、茨木では毎年九月敬老の日にゴルフに招待される上、一昨年から八十五歳を越えたので、毎回特賞が頂ける事になっている。スコアにこだわらず尚何とか十八ホールを廻れるのは誠に恵まれたものと思う。

若い時から音楽演奏の趣味を培っておいたお陰で、時折若い人達と弦楽合奏を楽しむ事が出来、「毎日が日曜」の身分になっても楽しむ術は幾らでもあり、子供の頃からたしなんだ囲碁は、三段の免状を頂いているが、まだ之に時間を潰すのは惜しい気がする。

私が会長を引き受けている日本アマチュア演奏家協会の会員が、十数年を経ても千人以上に増えないのが一番気にかかる。

音楽を通して交遊の輪が拡がる事を偏に念願している今日此の頃である。　（そごう商事㈱顧問）

## 鈴木商店
## ―家庭の中からかいま見て―

木村　毅

この度、兄昇に代わって準会員として本会に入れて頂くに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

父木村喜之助（明十八～明四十）は大正八年の頃入社、外国電信部主任、のち課長に登用された模様ですが、かねてより英書に親しみ、英国人宣教師について英会話を学び、若干の努力をしていた父にとって、このことは願ってもない有難い出来事で、毎日の仕事が本当に楽しいものであったようです。

大正十年には百数十円の家賃を払って西須磨のや、高台、千守町二丁目の身分不相応な屋敷に移り住んだのも、このような心境の表れでありましたが、他面では「子孫のために美田を買わず」という外遊を許され、大正十四年末から十五年初めの頃神戸を発ち、米国経由でロンドンに到着、ロンドン支店の皆様にたいへんお世話になりながら、職務上関係事項の調査や取引先訪問もしたらしいのですが、主として年来崇拝してきた思想家たち、就中、ジョン・ラスキレやトマス・カーライルなどの研究に打ち込み、全集や単行本などを片端から買い集め、また彼らのゆかりの土地を訪問して過ごしたようです。

大正元年以来ロンドンを中心に鈴木商店の事業の飛躍的発展に大きな貢献をされた支店長高畑誠一様は、父が到着した時はまだおられたようですが、既に台湾銀行からの要請で、危急存亡の事態に陥った本店を建て直すために帰国される直前であったように思われます。

このような重大な局面にあって父が知ってか知らずしてか、一年間、生涯またとない最高の好日月を楽しんでいたことは、誠に申し訳ない次第でありました。

やがて昭和二年春には破局が訪れ、父は急いで神戸に帰り着きましたが、鈴木商店のために多くの方々と苦労を共にすることも出来ず、早速自らの就職に血眼になって走り回るほかありませんでした。

幸いにデンマークの大北電信株式会社に採用され、同社が日本政府の政策により日本での営業が不可能になる昭和十六年まで営業チーフとして在職、その間経済的にはかなり恵まれていたようですが、時局の進展とともに、外貨節約を至上命令とする政府機関と外国電信の顧客である多くの貿易商社の利害とのはざまにあって、その営業活動は鈴木商店での仕事とは雲でいの差で、苦渋を極めたも